

2025（令和7）年度宇都宮大学国際学部 外部評価結果報告書（教育・研究）要旨

## I. 実施概要

### 1. 外部評価実施手順及びスケジュール等

2024（令和6）年度

2024年8月 外部評価委員候補者の選定

2024年9月 自己評価書構成案、エビデンスデータの提示（全学）

2024年10月 自己評価書作成開始

2025年3月 自己評価書 第一次案の完成

2025（令和7）年度

2025年5月 外部評価委員候補者の決定

2025年5月 自己評価書 最終版の完成・提出

2025年6月 評価委員に自己評価書送付、書面審査実施

2025年7、8月 評価委員による訪問調査（ヒアリング）の実施

2025年8月 評価委員から評価書を受理

2025年9月 改善事項等への対応案策定・外部評価結果報告書と要旨案の作成・提出

### 2. 外部評価委員名簿

高橋 亮 委員（JICA 筑波センター 所長）

中野 涼子 委員（金沢大学国際学類長）

益子 博美 委員（花のギフト社 元代表取締役社長）

## II. 評価結果

### 1. 注目される点と委員からの主なコメント:分析項目が十二分に達成されているものを中心に

<教育>

「アクションプラン 2022-2027 Vision1 未来を切り拓く人材の育成」

部局ミッションの取組状況

戦略1 学修者本位の教育の実現

○学修者本位の教育を実現するためのカリキュラムの見直し、国際系学部のモデルとなる「学際・多言語型カリキュラム」の再構築と情報発信

・令和4年度にカリキュラム改革WGを設置し、令和5年度にカリキュラム改定、令和6年度より新カリキュラム周知・実施と、着実に推進されていることに加え、将来的な教員削減の見通しを踏まえた

更なる検討も進められており、注目され、高く評価できる

・学際性と専門性のバランスをうまく保つ工夫をしながら、英語と初習・外国語を重視する多言語教育を行っている。海外協定校との連携を生かし、海外協定校とのつながりを生かして共同授業や「国際キャリア教育」への外国人学生参加を増加させることで、それらに参加した学部生は、留学以外の形でも異文化に触れ、外国人学生と共修する機会を得ることができる点は、高く評価できる。

・オンラインの活用により、学修者が留学しても4年で卒業できるための仕組みを整えている点もよい。履修ガイドでは、3～4年次における専門的な学習を見据えた教員ごとの履修モデルが提示されており、その後の進路を見据えた形で履修するための動機づけを促している点も、学修者本位の教育を中軸に据えているものとして評価できる。

#### 戦略4 共修によるグローバルキャンパスの構築

##### ○多言語教育の強化

・初習外国語検定の受験に対する経済的支援を行うことで、合格者を増加させている。また、卒論の外国語資料の使用を奨励し、実際に使用率があがっている点は高く評価できる。

#### 戦略5 高大接続改革と新たなアドミッションの展開

##### ○本学部の学びにマッチした資質・能力を有する入学者の確保のための取り組み

・高校生向けのセミナー等が、目標を大きく上回る8回開催（595名参加）を達成している。第4期中期計画に掲げた“入学者に占める県内高校出身者の割合（前期比5%増：指標5）”への寄与が期待される。

・一般選抜に加え、高校生の留まらない帰国生、社会人、外国人生徒等の多様な入学者を受け入れる取組を積極的に導入し、多様性を重視する国際学部の雰囲気を出している。

・動画の制作が達成指標を上回っているが、HPの公開がよくできている

#### 「教育の水準」の分析

##### 【第4期中期目標期間に係る特記事項】

##### 外国籍教員の割合

・多様性（ダイバーシティ）推進の結果、2割を超え3割以上となっており、本学部の特徴の一つとなっている点は注目される。

・全体的に増加しており、また、多様な地域の教員が存在する。

##### TOEICスコアの推移

・2年次までの汎用レベル、3年次以降の専門レベル習得という学生側にも分かりやすい目安を置き、EPUU連携による特別クラス開設や各種授業での取込み等、具体的な強化策を講じることで、2年次後期の平均スコアを着実に改善している点は注目され、高く評価できる。

## <研究>

「アクションプラン 2022-2027 Vision2 持続可能な社会の実現に資する研究」

部局ミッションの取組状況

### 戦略7 研究力の強化と研究支援体制の整備

#### ○教員の研究力強化

- ・30周年記念における2冊の書籍出版（学部所属教員による共著）は顕著な成果として認められ、注目される。
- ・ミッション達成支援経費（研究支援）の採択件数の顕著な増加、国際学叢書の出版（安定的）、サバティカル制度の活用、各種助成金の獲得、バイアウト制度の活用など、多方面の取組を着実に実施した点を評価する。

### 戦略7 研究力の強化と研究支援体制の整備

#### ○多文化公共圏センターを核とした組織的研究の強化

- ・異分野融合研究、共同研究、SDGsに関連する研究全てにおいて成果公表数が増加している。センターのホームページを通じて、研究の試みや成果が外部にもわかりやすく可視化されている点もよい。

### 戦略8 地域発オープンイノベーションの先導

#### ○国際学部としての研究のあり方の検証と研究成果の社会的発信の強化

- ・前中期目標期間に着手した「研究のあり方WG」設置を継承し、人文社会科学の研究とその成果に関する新たな評価指標の検討を踏まえ、その成果を对外公表したことは高く評価できる。
- ・人文社会科学の研究のあり方検証というユニークな試みを行っている。

「研究の水準」の分析

#### 【第4期中期目標期間に係る特記事項】

本務教員あたりの科研費採択内定件数(内定件数(新規・継続)/本務教員数)

- ・内定件数(新規・継続)/本務教員数は0.40前後で推移しており、複数学部の教員が参加する課題も含まれるなど多様性に富み、組織的な研究が進められている。また採択率は増加傾向にある。

### 学会賞の獲得

毎年度1件以上、計5件の学会賞等の受賞実績を有し、精力的に取り組んでいる。

主な研究業績(2022年度(令和4年度)～)

#### 主な研究業績(2022年度(令和4年度)～)

- ・学際性の優れた研究成果が複数発表されており、学会賞の受賞などに裏付けられる高い学術的価値が認められる。

## 2. 改善を要する点及びその対応策

### <教育>

| 指摘事項   | 対応策  |
|--|--|
| <p>戦略6 学生の多様なニーズへの支援の充実</p> <p>○学部長賞の創設</p> <p>・多様なニーズに対応するためには、優秀な学生だけでなく、躓きのある学生をどう支援するかが重要である。大学全体との取り組みも合わせて、支援の在り方を明示するとさらによいのではないか。</p> <p>・同指標については、現時点ではミッション期間中の評価指標に含まれていないようであるが、今後追加することも検討してはどうか。</p> | <p>学部長賞は、意欲的な取り組みをしている学生を対象としている一方で、学修上または大学生活に課題を抱える学生に対しては、国際学部における戦略1「国際系学部のモデルとなる『学際・多言語型カリキュラム（仮）』の再構築と情報発信」のうち、標準年限で卒業しなかった学生の留年の原因（単位不足・不本意な留年、学修者本位の自発的な留年等）を確認し、標準年限卒業率を効果的に向上させるための対応を講じる過程で、学年指導教員並びに卒業研究指導教員による継続的な支援をはじめ、大学が提供するピアサポーター制度、学生支援制度の活用を推奨している。</p> <p>学部長賞についてもミッション期間中の学部独自の評価指標に含める件については、次期の検討課題としたい。</p> |
| <p>戦略4 共修によるグローバルキャンパスの構築</p> <p>○国際感覚を養成するためのグローバルな共修の場の構築</p> <p>・グローバル人材育成プログラム（指標5.1）については、改善を要する。目標とした10名の修了生に対し、登録手続きの問題により2名のみの修了生となった（令和6年度）。確認された問題点と改善策にかかる学修者向けの丁寧な説明と参加奨励を行うことが望まれる。</p>               | <p>グローバル人材育成プログラムの登録を希望する学生が、確実に登録ができるように、年度初めに毎年開催している学年別ガイダンスでの学生への情報提供を徹底するほか、学生への説明会の開催を継続する等の対応策について、本件を担当する教務委員会、国際キャリア教育運営委員会において、教職員間の連絡と引継ぎ体制を整備する。</p>   |

以上